

陳述書

令和6年4月10日

作成者 みえ
かよ

1 はじめに

私たちは39歳になる同い年のレズビアンカップルです。今年で連れ添って10年になります。平成30年には、福岡市でパートナーシップ宣誓をし、令和元年にはフォトウェディングを行い、令和5年には九州レインボープライドという大きなLGBTコミュニティの祭典で公開結婚式を行いました。

この福岡の地で、長年ふうふとして暮らしてきた私たちとしての同性婚への思いを、ここに述べたいと思います。

2 二人が出会うまでのライフヒストリー

(1) かよの場合

ア 自分が同性を好きだと気づいたこと

私は男性とも女性ともお付き合いしたことがありますが、今はレズビアンという自覚があります。私が「同性のことが好きかも」と気づいたのは、中学生くらいの頃でした。当時、女性同士の恋愛を描いた漫画は少なく、「女の子同士の恋愛もあるのかな」となんとなく思うようになり、身近な女子に興味を抱くようになって、自分のセクシュアリティにだんだん気づいた感じでした。

イ 同性との交際

実際に初めて女性と交際をしたのは、高校3年生のときで、ネットで知り合った、熊本の人でした。私は福岡県の田舎のほうに住んでいたのです

が、田舎では同性と会うことは難しいこともそうですが、もし私が同性と交際していると知られば、偏見がはびこっているなか、暮らしていくことはできませんから、あえて遠方の人と交際していました。デートをするのももちろん、バレることをおそれて熊本でしかできませんでした。

高校を出てからは専門学校に進学しましたが、やはり交際はネットで知り合う人が中心で、地元の人達には絶対にバレないように、注意をしながら過ごしていました。しかし19歳のとき、妹からは、私がその頃一緒に遊んでいる女性がいることを怪しまれていました。当時から妹とは仲が良かったこともあり、妹にだけは先にカミングアウトしました。妹からは「やっぱりね」と言われたので、以前から私のセクシュアリティに勘付いていたんだろうと思います。

23歳のときに、当時交際していた女性と同棲することになり、初めて実家を出て別の福岡県内の地方都市に引っ越しました。その人とは1年ほどともに過ごしたのですが、性格の不一致で別れてしまいました。

ウ みえとの出会い

私たちの出会いのきっかけは、いまから約9年前のことです。レズビアンコミュニティの友達の友達として知り合いました。

みえへの第一印象は当時開催されていたLGBTイベントで見たことある人だなというものでした。その出会いがきっかけになり、みえは私のことを好きになってくれたようで、直球で私との交際を申し込んでくれました。私は「きっと愛情が強い人なんだろうな」と思って、交際を始めました。

交際して半年ほどする中で、もともと私も福岡市内に住みたいという気持ちもあり、みえの誘いもあったので、思い切って同棲することにしました。私は同棲経験も過去の1回のみだったので、この年で同棲するとなれば、一生一緒に添い遂げる人だという覚悟でいました。

エ 両親へのカミングアウト

そういった覚悟もあり、もう両親に、自身のセクシュアリティを隠したくないし、みえのことも隠したくないと思い、同棲する前にカミングアウトをしました。とはいえ、両親からどんな反応が来るのかと怖かった私は、対面では言うことができず、母にはLINEのメッセージで、父には手紙でカミングアウトしました。母はそのとき受け入れてくれたような態度でした。しかし本質的には、二人はまだ私のセクシュアリティをわかっていないのだと思います。

同棲にあたって、みえが挨拶をしに家に来たとき、父はみえのことをパートナーとしては理解しているものの、同性愛ということに関してはピンときておらず、友人のように仲良くしてくれました。ただ、みえのことを人として好感は持っていて一緒に旅行や食事、団欒をするまでになりました。

他方、妹と妹の旦那さんは理解があり、甥達もみえを慕ってくれています。

(2) みえの場合

ア 自分のセクシュアリティに気づいたこと

私は、幼少期から、はっきりと自分が「同性を好きだ」ということに気づいていました。幼稚園のときも女の子が好きでしたが、そのころはそれが変なことだと感じていませんでした。

しかし、小学校に入り「これはおかしいことなんだ」と自覚するようになりました。学校の教育も、当たり前のように、「男子」「女子」という二つの区分をされ、「男子はこうあれ。女子はこうあれ。」という像が当然のように押しつけられます。そのため、「女は男を好きになるのが普通で、そうでない人は普通ではない」という、その当時の「常識」を嫌でもつきつけられる日々でした。

そもそも、「男だから」「女だから」という理由で、何かを強いられること自体に当時から私は苦痛を感じていたのですが、学校という社会からは逃れることもできず、私は「同性愛」という自分の本質をひたかくしにして過ごしていました。中学生になっても、自分のような人は周りには一人もいないと思い込んでいましたし、学校でももちろん、同性愛者の存在なんて教えてはくれませんでしたから、「同性を好きなのはおかしいことで、そんなのは自分だけなんだ」と本気で思っていました。自分はレズビアンだと自覚してから、とても孤独で、漠然とした不安を抱いてきました。自分を偽り続けるか、ありのままで生きるのか選択肢は二つです。そもそもありのままとは何か自問自答する毎日でした。偽ることの方が苦痛で話を合わせ、嘘をつかざるを得ない日々とうんざりしていました。

今では型にはまることが窮屈と感ずるので自分のセクシュアリティはあまり深く考えなくなりました。自分の好きな色、好きな服装、好きな髪型、思いのままに選択しています。

イ はじめて同性の恋人ができたこと

高校に進学し、17歳の頃に初めて同性の恋人ができました。同じアルバイト先の子でした。ダメ元で私から勇気を出し告白しOKをもらいました。その恋人は女性とか男性とか関係無く、私という人間性を好きでいてくれました。おかげで初めて自分のことも受け入れられるようになりました。それから女性が好きであることへの違和感や、好きと相手に伝えることへの恐怖感は少なくなりました。

ウ 家族へのカミングアウト

そうして同性の恋人もできる中、とても仲良く過ごしていた両親や姉に、自分のセクシュアリティをごまかしつづけることが嫌になり、思い切って家族全員に、自分は同性を好きだ、ということのカミングアウトしました。家族皆驚いていましたが、両親はあまりピンときていないよ

うでした。17歳という若さもあり、一時的なものと思っていたようです。

幸いにも姉は一番私のことをわかってくれて、受け入れてくれました。私は、大事な両親に、自分のことを理解してもらおうと必死でした。「ここで私が逃げたら解決しない。家族を壊してしまうかもしれない。時間をかけて分かってもらおう。」という強い決意のもと、何度も何度も、しつこいくらいに両親と話をしました。当然、たくさん喧嘩もしましたが、私の決意も固かったので、一時の気の迷いなんかではないのだと説得していきました。そして、一番の理解者であった姉が「家族がわかってあげないで、誰がわかってあげるんだ」と、一緒に両親を説得してくれて、その後両親は、マイノリティに関する本や情報に耳を傾けてくれたりと、まず知ろうとしてくれました。時間はかかりましたが私のセクシュアリティを、両親も受け入れてくれるに至りました。

家族にカミングアウトをして22年が経ちましたが、今だからこそ親の気持ちを考える余裕ができました。自分の娘が同性愛者であることをいきなりカミングアウトされ混乱させたと思います。受け入れるのにたくさんの葛藤もあったと思います。でもそれなりに時間はかかっても家族を信じてカミングアウトして良かったと思っています。

エ 家族へのカミングアウトを経て

家族にカミングアウトをしたことで、私はふっきた気持ちになり長い髪をバツサリと切り自分らしさの追及を始めました。そして、ずっと夢だった、高校の応援団で「男子」がするとされている学ランを着ての応援をする夢を叶えました。その際、私の姿を見た女子たちが歓声をあげて、「かっこいい、似合うよ」と言ってくれました。そしてそれを機に、「そうだ、私はこうやって生きていこう」と自分を隠さず生きていく覚悟ができ、自分のセクシュアリティをオープンにして生きていくことにしまし

た。

それから身近な友人にもカミングアウトをしたのですが、中にはびっくりして泣き出してしまう人もいたものの、「もう気付いてたよ」と勘付いていた人もいたようで、幸いにも友人たちは私のセクシュアリティを受け入れてくれました。

比較的都会である福岡市では当時からレズビアン向けのイベントやバーなども あってそういうところで出会いを求める人もいるのですが、私はオープンになったこともあって、以後交際する人は、基本は学校や職場の人など身近なコミュニティの人が中心でした。

この頃から身近な人へのカミングアウトは私にとって自己表現のツール、信頼の証となりました。

オ 就職してからの苦痛

高校から専門学校を経て、就職したのですが、私は仕事をするうえで性的指向は関係ない、という考えでもあり、あえて職場ではカミングアウトをしていませんでした。しかし、飲み会の場になると、私含めた若い女性は特に「彼氏いるの？」と聞かれることが多く、苦痛でしかありませんでした。「いない」というと「どんな人がタイプ？」だの、「合コンするから来て」など面倒なやりとりが始まります。そのため、当時いた彼女を「彼氏」と見立てて嘘をつくしかありませんでした。しかし、そうしてやりすごそうとしても「彼は何の仕事？」「何歳？」など具体的な話を突っ込んで聞いてくるのです。一番最悪なのは「彼氏の写真見せて」です。当時はそういった会社の何気ないやりとりひとつひとつに追い詰められていました。そういったしんどさも相まって、転職をしたこともありました。

カ かよとの出会い

かよと初めて出会ったときの印象は、見た目は派手ではあるものの、話

していくうちにすごく真面目で芯のある人でギャップを感じました。また、私は、付き合うときには常に「この人と一生添い遂げる」という全力な思いでいることもあって、「かよとずっと一緒にいたい」、その思いから、私からの猛プッシュで交際するに至りました。

その後まもなく同棲を決めました。同棲にあたり、私はかよの親に挨拶に行き、あまりの緊張で吐きそうな気持ちでしたが、否定的な態度はとられることなく、ほっとしました。逆に、かよを私の両親にも会わせたのですが、私の両親もかよを好意的に受け入れてくれました。

3 同棲後の生活の変化について

(1) かよの場合

私は8年ほど前から、今所属している個人経営の歯科クリニックに歯科衛生士として勤務し始めました。私は、どちらかといえばクローゼット（いわゆる、自分のセクシュアリティを秘密にしている人のことです）でしたので、自分のセクシュアリティを身近な人にもオープンにしていませんでしたし、それは職場でも同じでした。しかし、みえも私のいるクリニックに来ますし、みえが問診票で記載する住所も私と同じですからいずれバレてしまう、と思っていました。また、飲み会になると同僚から「彼氏いるの?」と聞かれて、みえのことを「彼氏」と見立てて会話してごまかしていたのですが、今度は「結婚しないの?」と急かすようなことを言われるようになる中で、みえとの交際を黙っていることに限界を感じるようになりました。

そこで5年ほど前に、歯科衛生士の同僚3人との飲み会のときに、お酒の勢いも借りてカミングアウトをしました。この同僚の中にはドイツ（ドイツは同性婚もありますし、同性愛にも寛容な国です）に行っていた人もいたので、すんなり受け入れてくれて、ほっとしました。

それから2年ほど前に上司である歯科医ふくめ、職場全員へのカミング

アウトをしました。上司には以前、ミックスバー（多様なセクシュアリティのスタッフがいるバー）に飲み連れにいかれたこともあり、打ち明けても大丈夫かな、と求めてのことでした。上司は、「そうなんですかー」と普通のリアクションで、「結婚とかできるんですか」と興味をもって聞いてくれたので「日本ではできないんですよ。自治体のパートナーシップ宣誓制度とかはあるんですけど」といったことも話しました。職場の人達はカミングアウト後も変わらず接してくれています。

(2) みえの場合

私は、かよと出会う前から「何で同性同士での結婚ができないんだろう」ということをずっと疑問に思っていました。

そしてかよと付き合うようになって、その思いをますます強く抱くようになりました。少しでも私ができることで、同性婚の実現につながることはないか、と思い、同棲からまもなくしてツイッター（X）を使って私たちの日常生活を伝えていくことにしました。同性カップルのことを知らない人たちにも、「異性カップルと何ら変わらない、日常を過ごしているんだ」ということをわかってほしくて、何気ない一緒の夕食、デートの様子などを日々投稿するようになりました。かよもまた、途中から、私と意見を同じくしてくれてSNSでの発信をするようになりました。

今でもインスタグラムを含めてこういった投稿はずっと続けていますが、SNSを続けていく中で、私たちと同様に同性婚を願う人たちや、当事者ではないけれども私たちがいつか同性婚ができるよう応援してくれる「アライ」の人たちとつながっていくようになりました。差別や偏見はもちろんあるものの、それでも多くの人たちが私たちの関係を、「ふうふ」として受け入れていることもSNSを通じていっそう感じました。

4 福岡市パートナーシップ宣誓をしたこと

平成30年4月から、福岡市が同性パートナーシップ宣誓制度を導入することになり、私たちも5月に入って宣誓をしました。

同性カップルである私たちには、こんなに愛し合い、3年もふうふとして一緒に暮らしているのに、それを示す後ろ盾は何もない中で、「福岡市長之印」と書かれたパートナーシップ宣誓書受領証を見て、初めて公的に私たちが正式なカップルだと認められたことがとてもうれしく感じられたことを覚えています。

5 プロポーズ、フォトウェディング

(1) みえの場合

こうして過ごしていく中で、私はかよと「ふうふ」として暮らしていく覚悟で、かよにもそれを伝えたく、平成30年12月に、プロポーズを決意しました。（異性愛の夫婦だってそうであるように）私ははじめとして、「何があっても一生ともにする」という決意表明をしたかったので、その日は夜景の見えるすてきなレストランを予約し、私は指輪を準備して臨みました。かよには「これからもよろしくね」と言ってプロポーズをし、かよから「はい」と返事をもらいました。そして、令和元年5月には、私たちの交際5年記念日の日にフォトウェディングを行いました。私自身は、女性性を自分に強く感じているわけでもなく、ウェディングドレスを着たいといった願望もなかったのですが、かよはそうではありませんでした。きっとかよは、ウェディングドレスを着たいだろうな、と思い、私が言い出したことがきっかけでフォトウェディングをしました。私はタキシード、かよはウェディングドレスを着て、式場や海辺でたくさんの写真を撮影してもらい、「結婚はできないけれど、カタチとなるものを残せて良かった」と思いました。

(2) かよの場合

みえがプロポーズをしてくれました。みえ本人はサプライズのつもりだったようなのですが、みえは前からこういうサプライズというのが苦手で、指輪のブランドの袋が隠せてなかったり、夜景の綺麗なお店を予約したり、バレバレなところが愛おしかったです。

みえは、私にフォトウェディングも提案してくれて、初めはウェディングドレスには興味が無かった私を説得してドレスを着せてくれてありがとうという気持ちでした。

6 家を買ったこと

令和4年、私たちは、世帯年収も安定してきたこともあり、長年夢だったマンションを購入することにしました。しかし、同性カップルの場合、銀行によってはペアローンを組むことはできませんし、提出する書類も異なります。そもそも同性カップルへの差別・偏見もある中で不動産会社も受け入れてくれるか分からないまま手さぐりのマンション探しでした。かと言って私たちも諦めたくはなかったので、「欲しい」と思った新築マンションを見つけ、早速、3社の不動産会社を回りました。

「私たちは同性カップルで2人で共同でマンションを購入したいです。」とカミングアウトしてから購入の相談をするので、どんな反応をされるか緊張しましたが、幸いにも差別的な対応を受けて嫌な思いをすることはありませんでした。ただ、反応は三者三様で、「どうしたらいいんでしょう」ともじもじしだす人もいれば、「うちの会社では前例がありません」と言う人もいました。もともと、私たちも買いたい家を諦めるつもりはなかったので「前例がないなら前例を作ってください」と、不動産会社に説明できるように準備していた、同性カップルがペアローンを組むための手立てや、銀行がどこであるかなどを説明しました。だんだん、私たちの熱意に応えてくれたのか、不動産会社のほうから「勉強させてください」と、私たちに同性カップルが家を買うための手法を尋ねてきてくれたりと

前向きな反応をしてくださることが多く、検討していた不動産会社のうちの一社で契約できることになったのです。

また、同じ頃、令和4年4月1日付で福岡県でパートナーシップ宣誓制度が始まることになり、私たちは導入からすぐに、福岡県でもパートナーシップ宣誓をしました。確実に社会は変わってきていることを感じる一方で、自宅購入のためのペアローンを組むためには、3通ほど公正証書を作る必要がありました。決して安価なものではありません。家を購入してからゆっくりと作ろうと思っていましたがローンの審査に必要だったので作成しましたが、作成にも時間がかかりすぐに家の購入にはいたりませんでした。同性婚さえあれば、婚姻届を一枚出すだけで済むはずのものを、これだけの費用と労力と時間をかけて作らなければならないことは、とても負担に感じました。私たちはたまたまお金があり、それができたものの、皆が皆そういう方法を取ることもできませんし、できたところで、法的にカバーできる部分も限られているため、同性婚がないことにより生じる壁の高さに、苦しさを覚えました。家を買うためにいろんなことを調べていく中で、いかにパートナーシップ宣誓制度が、私たちを「ふうふ」として守るという意味で無力で、私たちカップルは何にも守られていないのだなということを痛感させられたのです。

7 原告こうすけさん・まさひろさんと知り合ったきっかけ

私（みえ）は、上に述べたように、Xで私のレズビアンとしての日常生活を発信していたのですが、Xでのやりとりを通じて、「結婚の自由をすべての人に九州訴訟」の原告である、こうすけさん・まさひろさんとつながりました。裁判という大変な戦いを、私たちふくめてこの国で同性婚を望むカップルたちの代弁者として、一生懸命頑張っている姿に、私たちもすごく勇気づけられ、応援していました。

そして令和5年4月に、弁護団が主催している、同性婚を実現するため

に国会議員にお手紙を書くイベントがあると知って、かよは都合で参加できなかったので私ひとりで参加し、そこで初めて、こうすけさん・まさひろさんカップルと対面しました。私たちは年代も近いこともあり、また互いに、お酒が好きなことや、同性婚実現への強い気持ちもあり、意気投合して、カップル同士、一緒に飲み会をするほどの仲になりました。

8 「結婚の自由をすべての人に九州訴訟」の判決

私たちは、こうすけさん・まさひろさんカップルと知り合ったこともあって、令和5年6月5日に行われる、「結婚の自由をすべての人に九州訴訟」の判決を聞きに、初めて傍聴に行くことにしました。

幸い二人とも傍聴券に外れることなく、直接聞くことができたのですが、難しい言葉を裁判官が読み上げていくため、原告さんたちや弁護団の皆さんの顔色、反応から空気を読んで、あまり良くない判決だったのかなと感じ取りました。

初めて傍聴し、「違憲」ではなく「違憲状態」という曖昧な判決だったということがわかって、きつとちゃんとした「違憲」判決を獲得するのは、まだまだ時間がかかってしまうのかもしれない……と、その日はどこかほの暗い気持ちで、私たちは帰宅したのでした。

9 九州レインボープライドでの公開結婚式

(1) 結婚式をすることになった経緯

福岡市では、毎年11月に「九州レインボープライド」という、LGBTQ+を祝う大きな祭典が開催されています。博多の街中の大きな公園の中に、多くの支援団体・企業がブースを出店し、LGBT関連の商品を販売したり、PRをしたり、展示を行ったり、ステージでダンスやトークイベントを披露したりと、LGBTをテーマにしたイベントとしては九州の中で1年を通してもっとも大きなイベントです。平成27年

から行われているのですが、 私たちも毎年できるだけ参加していました。

令和5年の秋頃、そのイベントの主催の方から「令和5年11月4日に予定されている九州レインボープライドのなかで、公開結婚式をしないか」との話が舞い込んできました。主催の方が、こうすけさん・まさひろさんと仲が良く、二人が、結婚式の候補となるカップルとして私たちを推薦してくださってのお話しでした。

九州レインボープライドは大きなイベントですし、当然、当日はテレビ局や新聞社の取材も来ますから、大々的に報道もされてしまいます。私たちだけの問題ではなく家族にも影響があるかもしれないと思い、数日迷いました。しかし、同性婚が進んでいかない現状や、同性婚訴訟の残念な判決のこと、同性婚実現に向けてがんばっているこうすけさん・まさひろさんをはじめとした原告さんたちのことを思い、私（みえ）は、「同性婚が実現するために、そろそろ自分自身も行動を起こしていきたい。何かしら行動を起こすことで社会にも良い影響がきっと出る。」と思うようになりました。かよは、「みえがやるならやる」と言ってくれたので、お話を受けることになったのです。

それからはプランナーとやりとりをしながら、誰を呼ぶ、どんなふうにして進行する、司会を誰にする、といったことを決めていきました。司会は、この結婚式実現につないでくれた、こうすけさん・まさひろさんをお願いすることしました。また、家族は同性婚が認められてから招待したいという気持ちもあり、今回は招待しませんでした。

招待客については、以前からレズビアンコミュニティの中で仲良くしている友達を中心に50名ほど呼ぶことにしました。早速招待客の友人たちに結婚式を開くこと、それに是非きてほしいということを言うと、すごくびっくりしていて、中にはその時点でうれしすぎて泣いてくれた

人もいて、「絶対行くね！」と皆あたたかい言葉をかけてくれました。

(2) 結婚式の当日のこと

そして、令和5年11月4日、結婚式当日。前週の天気予報は雨だったのですが、幸いにも当日は晴れてくれました。私（みえ）は紋付き袴、かよは白無垢を装って準備していました。前夜、爆睡だった私と違い、かよは緊張でほとんど眠れなかったようなのですが、メイクを受けながら「大丈夫、緊張してない」と笑いながら言っていました。

緊張と期待を抱えたまま、本番の時間となり、司会のこうすけさん・まさひろさんの合図で、私たちは公園の真ん中に用意されていたウェディングロードを歩き出しました。ウェディングロードの両側には参列者たちが並んでいましたが、式場として用意されていたスペースの周りを囲うように、学校の友人やサプライズで来てくれていた友人、そして九州レインボープライドに来ていた多くの方々が見に来てくださっていて、祝福の笑顔や涙であふれていました。私（みえ）も涙をこらえるのに必死でした。既に会場はあたたかな空気感に包まれていたのを感じました。結婚式は、人前式のスタイルでした。招待客だけでなく式を見かけて立ち止まってくださった方々も含む大勢の前で、私たちは愛を誓いあい、司会の二人の「二人の結婚の証人となってくださいますか？」と言うとその場にいた皆さんから大きな拍手をいただき、私たちの結婚は「承認」されました。

そして、この日は、かよの誕生日でもありました。私はサプライズでプレゼントを用意していました。それは、100歳までの5年ごとの、かよに宛てた12通の手紙です。これからずっと、私の隣で人生をともに歩んでいくパートナーとして、一緒に長生きしてこの手紙を読んでほしい、そして、かよに何かあったときには、私がかよを看取りたい。そんな思いからでした。プレゼントを渡しながら、私は、かよに「この先10年20年、どんな困難があろうとも、2人で協力してひとりで頑張らずに、お互

い支え合って乗り越えていこうね。もう家族同然なのに、法的に家族になれないのは悔しいけど、こうして挙式ができたことをうれしく思います」と想いを伝えたのでした。

(3) 結婚式のあとのこと

結婚式をあげたあと、知り合いの方々だけでなく、初めて会う多くの方が声をかけてくださいました。祝福の言葉だけでなく、同じく同性カップルの方々からも、「背中を押されました。」「私たちも後に続きたいです。」「結婚式をしたって思うようになりました。」といった言葉をいただき、私たちが式をしたことで、前向きな気持ちになってくださった方々がいるんだと思うと、本当に結婚式をして良かったなと思いました。また、私たちのこの結婚式は大きく新聞・テレビ等のメディアでも報道され、その多くは、「同性婚が日本ではできないこと」を問題提起する内容のものでした。

そして、私（みえ）の職場にも変化が起きました。私は、上にも述べたように職場では 同性パートナーがいることを積極的にオープンにしていなかったのですが、式をしたこともあって覚悟も決まり、勤務先に「会社の社内規定として、同性カップルの関係性を認めてほしい。福利厚生面も整えてもらいたい。」ということ直談判することにしました。私の勤務先は比較的大きな会社なので一社員が声をあげたところで何も変わらないのではないかと考えていましたが、人事部長が本社から福岡までわざわざ足を運んでくださり面談の時間をいただきました。私の思いを真剣に伝えたところ、幸いにも大変好意的に受け入れてくださり、「ニュースの映像も観たい。会社でできる限りのことは やっていきます。」と言ってもらえたのです。そして実際に私たちは、それまで異性同士の結婚にのみ認められていた結婚休暇を取得することができ、その他にも結婚祝い金や、パートナーの家族のための慶事休暇等を認めて

もらうことができたのです。あわせて、かよの職場でも、パートナーシップ宣誓証明書を提出したことで結婚休暇を取得することができました。

私たちが結婚式をしたことで、私たちを取り巻く家族・友人・会社、式に立ち会ってくださった方々、報道を見た人々、同性婚を待望している人々、たくさんの方に良い影響を与えることができたことを実感でき、勇気を出して結婚式をしてよかったなと感じました。

10 同性婚への希望

(1) かよの場合

私は、正直に言えば「同性同士が結婚できないこと」を当たり前のことだと思っていました。社会がそうなっていて、そのことは変わるようなものではなくて、私たちに権利も保障もないことを、無自覚に受け入れてしまっていました。

しかし、私より前から「私たちが結婚できないのはおかしい」と声をあげているみえと過ごしていく中で、私たちの関係性に何らの権利も法的保障もないことは、本当は「おかしい」ことで、怒っていいことなんだ、ということを感じるようになりました。

私は上に述べたように、個人のクリニックに歯科衛生士として働いています。職場は私のセクシュアリティを受け入れてくれているものの、私とみえとの関係が、職場内でも法律上の「ふうふ」として当然に扱ってもらえているわけではありません。パートナーシップ宣誓証明書を出すことで結婚休暇を取得させてもらえたことはありがたい一方、異性同士の結婚なら、当たり前のことで、申請をするのに勇気を必要とすることでもないわけです。

また、私はいまだに両親から、本当の意味では私のセクシュアリティを理解してもらえていないと感じています。生まれてきたからずっと過

ごしてきた家族に、自分の本質を受け入れてもらえていないことはとても悲しいことです。同性婚が当たり前にある社会だったら、同性愛者の存在も当たり前に受け入れられていたでしょうし、私と家族との関係も、今よりはもっと深いものであったのでは、と思います。

みえと歩んできたこの10年間、法的保障がないことで、しなくてもいい多くの心の負担、経済的負担を抱えてきました。それだけの負担を負っても、ほとんどのことは解決しませんでした。

それでも私たちが10年間続いているのは、そして、みえからもらった手紙を100歳になっても一緒に読むまでずっとともにありたいと私が思っているのは、みえの「しつこいぐらいの努力」があったからです。何度ぶつかることがあっても、私のことを一番に理解し、真正面から向き合ってくれたからです。しかし、法的に何の後ろ盾もない私たちの関係はどこまでいっても不安定です。将来に希望が見えず、異性愛カップルと違ってぶつかる壁も多いがゆえに別れてしまう同性カップルも現実には沢山います。

残念ながら、同性婚に関する政府・国会の動きはとても悪く、そういった政治の動きが裁判にも影響しているように思えてなりません。しかし、国会が動かないから裁判で戦おうとしているのに、その国会の動きを見るのはおかしいことだと思います。

早く私たちの関係性が法的に守られるように、同性婚が実現できるよう、この裁判が良い結果となることを心から祈っています。

(2) みえの場合

令和4年2月に、とあるレズビアンのカップルの片方が交通事故に遭って亡くなったものの、遺族として残ったパートナーは、その年8月に行われたその事故の刑事裁判で「被害者遺族」として法廷に立つことが許されなかった、というニュースが流れました。私はそのカップルとSNSでつ

ながっていました。彼女は大切なパートナーを失うという苦しみを味わっただけでなく、裁判の場で「あなたは他人にすぎない」ということを押しつけられた痛みまで味わうことになったのです。このニュースは私たちにとっては全く、他人事とは思えませんでした。

このニュースに限らず、特に「死別」という重要な場面において、長年連れ添った同性カップルが引き裂かれる残酷なニュースは尽きません。明日、私かかよが、同じことになってしまうかもしれない。そのとき私たちは、「ふうふ」として、病院に受け入れてもらえるのでしょうか。葬儀にも立ち会えるのでしょうか。私たちが購入し、今住んでいる家に私たちは住み続けられるのでしょうか。仕事をし、税金も払い、今も将来も、私たちの関係によって誰かに迷惑をかけないようにたくさんの準備をしている私たちが、これ以上どんな努力をすれば、「ふうふ」として認めてもらえるのでしょうか。

パートナーシップ宣誓、互いの家族の理解、家の購入、会社のこと、結婚式。一つ一つクリアする度に、喜びや感動はありますが、その度に多大な労力を費やし、結婚できないことで乗り越えられない壁にも何度もぶちあたってきました。なぜ、同性愛者としてただでさえ偏見・差別にさらされている私たちが、多大なる労力をかけ、誰かを説得したり、本当ならばしなくてもいい戦いをしたりしなければならないのか。婚姻届という紙一枚ですべてを簡単にクリアできる異性愛カップルのことをうらやましく思います。

私たちはどちらかといえばオープンにして暮らしているカップルであるため、自分たちの関係性を社会に受け入れてもらうために声を上げることもできました。しかし、差別・偏見の多い日本ではまだまだオープンな当事者ばかりではありません。どこかで日々つきたくもない嘘をつき、自分の存在価値を見出せず悩み苦しんでいる人々やカップルがいます。そして

そういった人々は、決してテレビの中の存在でも、遠いどこかの場所の話でもありません。もしかしたらすぐ隣にいる人の話、なのです。

私が強く思うことは未来の若者たちが私たちのように苦しい思いをしないこと、ちゃんと自分らしく堂々と生きられるようになること、異性・同性関係なく婚姻の平等があり、当たり前にあふれる人との国、日本で結婚できること、その環境をいち早く整えるべきだということです。

3月14日に札幌高裁で「違憲」という判決が出ました。この日私はかよに、「生きている間に結婚が叶うかもしれない。」と涙ながらに伝えました。ずっと「生きているうちに、かよと結婚したい」と願い続けてきて、それにもかかわらず、国会は「検討する」「注視する」の繰り返しで、私たちの願いが叶うことは難しいのだろうか・・・と思っていた中での札幌高裁違憲判決は、私たちにとって強い希望を感じさせてくれました。しかし、落ち着いて考えると、私たちも来年で40歳を迎え、人生が有限であることも現実として感じています。先に述べた、交通事故でパートナーを失ったレズビアンカップルも、私たちと同年代です。そんなことを考えていると、「生きているうちに、いつか」だなんて悠長なこと言っていられないとも思いました。

最後に、私たちの九州レインボープライドの結婚式の写真を添付します。社会はもう変わっています。遅すぎる政府・国会での議論や答弁を上塗りするだけの判決にならないことを心から祈っています。

以上











